

江別市教育研究会（理科小部会）教育サポート報告

【サポートの概要】

江別市内の小学校理科教職員が構成する研究会が取り組んだ、野外活動「校地内木々を知る」の講師として活動をサポート

現場：江別市東野幌小学校→対雁小学校→豊幌小学校

日時：10/29 14:00~17:00

対象：理科担当教諭（東野幌 3 名、対雁 3 名、豊幌 1 名、延べ 7 名）

担当：三木昇（生物分類技能検定一級（油津依頼））

サポート：五十嵐敏彦、油津雄夫

【サポートの内容】

ことの起こりは、全く面識がない小学校の先生から人づてに技術士会の活動を知り、技術士会のメンバーから学校に植えてある木の名前を教えてもらいたい、という依頼が入ったことだった。早速、打ち合わせに伺ってみると、学校内の木々の多くが植栽された「園芸種」で、地域の植生環境を代表する木々ではないことに気づき、いまさらながらに愕然とした。

こういった人為的に細工された木々の緑で、生徒たちに自然を感じさせるのは実に問題で、そのことを先生たちにも考えてもらいたいと感じた。学校の木々の名前を知ってもらうのはもちろんのこと、併せて、もともとその地域に生育していた樹種と、人によって植えられた移入種を区別してもらおうと、学校周辺の自然植生を観察するよう提案した。

江別は大きく見れば野幌丘陵と石狩川や千歳川の氾濫原低地からなる二つの地形区からなり、在来植生もその地形に合わせて独特の組み合わせを持っている。そこで、丘陵地付近の雑木林ではミズナラ・イタヤカエデ・ハルニレ・シラカバ・オニグルミ……などの木々を、小さな沢筋ではヤナギ類・ヤチハンノキの純林などを案内した。豊幌に移動する間の河川沿いや低地帯ではヤチダモ・ハンノキ・ヤナギ類を見てもらった。

その上で、改めて校内の木々を観察し、在来種とアカマツやカラマツあるいはポプラやイチョウを始めとする持ち込まれた「園芸種」を識別し、学校林の

何割ぐらいが地元の緑であるかを考えていただいた（三木さんが樹種の判定と解説を行い、五十嵐がガムテープに名前を記入して貼り付けて歩いた）。



写真 1：学校林の観察 写真 2：三木さん（後向き）の説明を受ける先生たち

【印象】

今回初めて生徒相手ではなく、先生を相手に教育サポートを行った。しかも理科教師の集まりで釈迦に説法みたいなものだったが、地域の在来植生と学校を飾る園芸種の違いを感じてもらおう、という視点でお話したのが良かったらしく、目からウロコの先生も多かったようだ（理科の先生でも大学卒業時の専門科目は様々）。

先生方のニーズは「木の名前を教えて」だったが、それだけでは面白くない、と思いこちらからテーマを深めるための逆提案を行った。前回の丘珠小学校でもそうだったが（最初の依頼は火山灰）、その地域・地域にあるもので理解を深めてもらうのが大事なのではないだろうか。先生自体がそのことに余り気づいていないようなので、これからもこの路線で行けたら良いと感じたサポートである。

（文責 五十嵐敏彦）